第十二回 松本清張 Matsumoto Seicho

研究奨励事業

研究報告

清張古代学と魏志東夷伝
―清張邪馬台国論の行方―

徳島大学大学院　教授
東　潮

北九州市立
松本清張記念館

清張古代学と魏志東夷伝

―清張邪馬台国論の行方―

徳島大学大学院　教授
東　潮

目　次

東夷伝里程論　1
『古代探求』と東夷伝　3
松本清張編一九七五『邪馬台国99の謎』　4
『清張通史1　邪馬台国』と東夷伝研究　4
「吉野ヶ里と邪馬台国の影」そして「逃げ水　邪馬台国」へ　7
松本清張と朝鮮・ベトナム
松本清張と軍隊　12
京城龍山と井邑　13
松本清張とベトナム　14
調査写真　15

清張古代学と魏志東夷伝

―清張邪馬台国論の行方―

徳島大学大学院　教授　東　潮

郷原宏は「古代史の薪は二度燃え上がる―「陸行水行」の成立と展開」において、松本清張の邪馬台国の軌跡を位置づけた（『松本清張研究』六、二〇〇六）。

「陸行水行」（『週刊文春』一九六三年一一月～六四年一月）

「古代史疑」（『中央公論』一九六六年六月～六七年三月）

「遊古疑考」（原題「遊史疑考」『芸術新潮』一九七一年一月～七二年一一月）

「古代探求」（原題「古代への探求」『文学界』一九七一年一月～七二年一一月）

「古代史私注」（『本』一九七六年二月～八〇年十二月）

「清張通史」（『東京新聞』一九七六年一月～七八年七月）

「逃げ水　邪馬台国　吉野ヶ里に見えた邪馬台国は陽炎にすぎない」（『文藝春秋』一九八九年七月）

『清張古代游記　吉野ヶ里と邪馬台国』日本放送出版協会、一九九三年一一月

「陸行水行」は古代史テーマ小説の第一作で、「古代史疑」で本格的な邪馬台国論を展開した（郷原宏二〇〇六）。

小説の上で邪馬台国の探検に船で行こうという設定は、角川書店主によって古代の船が作られ朝鮮海峡を渡る試みとどこか発想が似ていないでもない。もちろん、この小説は、論文として書かれたものでなければ、私の邪馬台国論を小説にしたものでもない。…その後二年にして『中央公論』に「古代史疑」を執筆した。いうならば私を古代史の論文執筆に走らせたのは、この短編ということができる（『松本清張自選傑作短篇集』読売新聞社、一九七六）。

東夷伝里程論

『三国志』東夷伝の冒頭に、『尚書』禹貢篇や『周礼』の九服の制について明記され、そうした天下観にもとづき、公孫氏を討伐して「絶域」を開放し、楽浪・帯方郡を支配した。東夷は屈服した。さらに高句麗の背反にたいして討伐し、東海の地まで征服した。その恩恵で東夷諸国について記述でき、夷狄の国に礼のあることも知られるようになったと。東夷諸国とその都の位置関係、里程、境域を検討したところ、倭人伝もふくめ東夷伝が天下観にもとづき記載されている。魏による東方征服と脈絡がある。倭人伝は洛陽―楽浪の五千里の禹貢の五服説、帯方郡から邪馬台国までの万二千里は『周礼』の九服説による。京師からの地理観を郡治から距離観におきかえる小天下観であった

このように魏志東夷伝が魏の天下観にもとづき記述されていることに気づいた（東潮二〇〇九「『三国志』東夷伝の文化環境」『国立歴史民俗博物館研究報告』一五一）。ところが東夷伝の里程論については、松本清張の「古代史疑」（一九六八）で展開されていた。

・里数の記載も「玄菟を去る千里」「方二千里可」「遼東の東千里」「方二千里可」「西南に長く、千里可」「夫余の東北千余里」というように、いずれも二千里、千里単位の同数である（全集三三、四四頁）。

・「倭人伝」が狗邪韓国から対馬国まで、対馬国から一支国まで、一支国から末盧国までのそれぞれの距離をすべて「千余里」で片づけたと同じ筆法である。

・「東夷伝」記載の里数も虚数なら「倭人伝」の里数も虚数（全集三三、四四頁）。

・狗邪韓国から不弥国までの里数は五百里をもって基準とし、狗邪韓国から対馬国までの千里は、だいたい、末盧・伊都間の五百里の倍と考えて千里としたようだ。対馬・一支間、一支・末盧間の各千里も同じ五百里をもってした基準である。（全集三三、五五頁）

・五百里をもって基準とした理由は、中国上代にできた「五服・九服」の制度にみられる王畿を中心とした区域の距離五百里に拠った。『周礼』の記事を引用（全集三三、五六頁）。

・「百」は「多数」という意味。銅鏡百枚の「百枚」も「多数の鏡」という意味（全集三三、五一頁）。

・「三十国」も「百余国」に対する数で、多数と少数の比較表現。九国＋二十一国＝三十国でなく、三十国－九国＝二十一国（旁国）（全集三三、五二頁）。

・「弁辰韓合わせて二十四国」も、六国から十二国、十二国から二十四国と倍数する。馬韓の五十余国、それに二十四国を加えた七十余国にも「倭人伝」のその他の旁国と同じようにもっともらしい名前がはめられている（全集三三、五二頁）。

・戸数も、白鳥によれば、対馬国から不弥国までの六カ国の戸数合計が三万になるので、投馬国が五万、邪馬台国が七万戸というふうに、三、五、七とつくり出した。陰陽五行説に基づく（全集三三、五四頁）。

・日数も、陸行と水行とを「三十日」「三十日」と同数で対置させた（全集三三、五七頁）。

「これまでの諸学説の論議がいかに「倭人伝」の虚妄の数字を抱いて苦悩してきたか、その愚かさに呆然となるに違いない」（全集三三、五七頁）と痛烈な批判である。その批判は自らの邪馬台国論が問われることになる。

松本清張は、邪馬台国、筑後国山門郡説で、「倭人伝」の方向記事は古代航海者の感覚をもとにしているから信憑性がある。「里程や戸数は虚妄の数字」という。「三世紀の末にこれを書いた陳寿という一人の中国歴史家の観念を凝視しなければならない」と指摘する。さらに禹貢説について、再論している（松本・鈴木武樹一九七五「日本古代学の魅力」『東アジアの古代文化』一九七五早春）。「里数・日数が陰陽五行説から出ている机上の数字で、陳寿の創作」で、「いわゆる蛮夷朝貢国のほとんどといっていいくらい長安から一万二千里」で、「陳寿が《倭人伝》を書いたとき、この『漢書』の書例にならって「郡より女王国」まで万二千里とした」。「「洛陽より女王国まで」としないで、「郡より」としたところに大きな意味がある」。禹貢の説にもとづき、「帝王は方千里、それを中心にして方一千里までは服属地だが、方一千里以遠は非服属の野蛮の地という意味」で、「万二千里」はこの非服属地にあたる。

以上のように松本清張は、東夷伝の禹貢説に着目するが、「『魏志』「倭人伝」の里数、日数はまことにナンセンスなものである」と結論づけ、江戸時代以来の倭人伝の里程論を批判する。「古代史疑」以後の展開過程をみることにする。

「古代探求」と東夷伝

「古代史疑」（一九六六）から「古代探求」（一九七一）への過程で、論を展開する。

わたしは以前に、『古代史疑』（中央公論社刊、昭和四十三年三月）という「邪馬台国」のことを書いた本を出した。そのとき、『魏志』「倭人伝」は「東夷伝」から独立したものではなく、その一項目にすぎないから「東夷伝」の「倭人」ノ条として、『魏志』の朝鮮関係全体の中で見なければならないと主張した。そういうことをわざわざ云わなければならないほど、当時の古代史学界は日本のことだけに独拠していた。最近の「東アジア史の一環」という傾向はよろこびにたえない（『全集』三三、一四二頁、「古代探求」）。

これらの里数、距離数は「倭人伝」の編者の陳寿、またはその資料になった魚豢の『魏略』の造作による虚構とした。陰陽五行説による好数の三、五、七を振り当てられたものだといったのである。虚妄の数字とする。

そもそも「郡より女王国に至る万二千余里」の数字からしておかしく、『漢書』「西域伝」には長安から西域方面の国で、都護府を置かない、いわゆる蛮夷朝貢国の都城まではほとんど一万二千何百何十里というように一万二千里台であらわしている。実数ではなく、遠いという意味の観念数字だと思う。『魏志』が『漢書』の書例にならって書かれていることは牧健二の指摘した通りである。倭国は魏の属国でなく、いわゆる東夷朝貢国であるから、魏の出先官庁のあった帯方郡（京城附近）から女王国までを「万二千余里」としたのであろう。これも虚構の里数である（『全集』三三、一四三頁、「古代探求」）。

清張は自ら着想にいたった経緯をのべる。

わたしの提出した五行説の数字は、白鳥庫吉が倭の各国の「戸数」を小計してみて云い出したこと（『オリエンタリカ』二号）からヒントを得たもので、白鳥自身が本気で云わなかったせいもあって、学界ではだれも注目するものがなかった。だが、わたしのこの考えは今では学界の一部にいくらかでも顧みられるようになって、藤間生大『埋もれた金印』（第二版・岩波新書）、井上光貞『日本国家の起源』（改訂版・岩波新書）、上田正昭『日本神話』（岩波新書）、同氏『日本の原像』（文藝春秋刊）などにふれられている（『全集』三三、一四四頁、「古代探求」）。

岡本健一は「松本清張の邪馬台国論」において、「『魏志倭人伝』にみえる帯方郡から邪馬台国までの距離・日数や国々の戸数は、著者の陳寿が中国古代の五行説にもとづきながら、七・五・三などの数字を適当にまくばってでっちあげた虚妄の数字（虚数）であって、信頼できないと説いた」という（『松本清張研究』六、二〇〇六）。

さて『漢書』地理志の燕地ノ条の「倭人」はよく引用されるところであるが、「その上段の文章」を重視する。

「東夷天性柔順、三方の外に異る。故に孔子は道の行われざるを悼みて海に桴を設け九夷に居らんと欲す。夫楽浪海中倭人有り、分れて百余国と為す、歳事を以て来り献見すと云う」。「倭種の「礼節的」な風習は、論語に当てはめて考えた陳寿（または魚豢）の机上の創作であり、あきらかに儒教というよりも道教の影響である」と。

倭国と魏との「通交関係は正しくは服属関係であって、倭国からの朝貢に対して魏は賜物をくれる」。「蛮夷国に対する下賜という中華思想」であった。

三角縁神獣鏡は和製説をとる。

「三世紀半ばに九州北部を統治するほどの強力な勢力が大和に存在したとはわたしには思われない。もし、それほどの強力政権が大和にあったとすると、魏への朝貢にはもっとましなものを出しただろうし、量はもっと多かったに違いない。班布二匹二丈という貧弱さはやはり地方政権相応なものであって、この点からみても女王国（邪馬台国）は九州北部地方であったとしたほうが自然だろう」（全集三三、一五一頁）。

松本清張編 一九七五『邪馬台国99の謎』

松本清張は、近代日本のなかでの、邪馬台国・卑弥呼論が天皇制と抵触することを洞察していた。

「戦前までの邪馬台国研究は皇室の尊厳という禁忌によってその自由は抑圧された。倭人伝の記載が日本古代国家の成立に深いかかわりがあるらしいと気づいていたのは日本書紀の編者自身で、倭の女王卑弥呼の記事を神功皇后紀に挿入せざるを得なかった。書紀の編者はこれをもって神功皇后が卑弥呼と同一人であるとの幻像を暗示したのだが、そうすれば中国に朝貢したり、賜物をもらったり、その使者が魏の爵号をもらったり、あるいは魏の黄幢（軍旗）を授かったり、告諭を受けたりしたことが、皇室の尊厳にかかわることになる。そこで、卑弥呼が魏に「倭の五王」として使者を送ったのは、九州の女酋の僭称にてもあるべしという江戸時代の学者の発言となる」（松本清張編一九七五『邪馬台国99の謎』サンポウ・ブックス九〇）。

松本清張の邪馬台国論は「東夷伝」から「西域伝」におよぶユーラシア世界におけるものであった。

「邪馬台国のことは倭人伝に書かれており、倭人伝は魏志東夷伝のなかの夫余、高句麗、東沃沮、挹婁、濊、韓の諸条と共に、東夷伝の一項目である。だから倭人伝のみを切りとって云うのは適当でなく、前記の東夷伝諸国の条はもとより、北アジアの烏丸・鮮卑伝も同列に置いて眺め考究しなければならない。そういうこともわたしは考えて「古代史疑」に書いたりしたのだが、もとよりわたしの論及は貧弱で、取るに足りない。が、現在、邪馬台国問題といえば必ず東夷伝の古代中国東北部や朝鮮との対応で論じられ、それがさかんになってゆくのは喜びの大きいところであり、われわれに対して利益をもたらすのである」（『邪馬台国99の謎』）。

すでに一九六六年の「古代史疑」で問題提起されていたが、先見性があった。『邪馬台国99の謎』を編集し、自ら謎にいどむ。一九七五年は「邪馬台国への道」踏査、古代推定船・野性号の航海実験の年であった。清張の邪馬台国論はさらに東アジア世界のなかで展開する。

「清張通史1　邪馬台国」と東夷伝研究

松本清張の邪馬台国にかかわる論説のなかで、倭人伝・東夷伝里程論は学史にのこるにちがいない。「古代探求」から「清張通史1　邪馬台国」へ、さらなる展開をする。「本書執筆にかぎって、わたしじしん、小説書きであることを抹殺した」うえでの論だ。

「「倭人伝」は「東夷伝」のなかの一項目だから、「倭人伝」だけをきりとって考えるべきでなく、「東夷伝」諸国の記事をもいっしょに見わたしながらその研究が書かれなければならない」（全集五五、二一頁）。

『日本書紀』の邪馬台国関係記事を検証し、とくに「景初二年」問題にかんして、「二年」は「三年」の誤りで、「八世紀初頭の『書紀』の編者は、原

本に近い写本をじっさいによんでいたのである」。

本書では「東夷伝」の「序文」を検討している。この東夷伝の序についてはふれられることはすくない。まず陳寿が「西域伝」を意識して「東夷伝」を書いた意味を問う。

「漢は張騫を西域に使いさせた。張騫は河源を窮め、諸国を経歴した。漢はその地域に都護を置いて総領したので、西域のことがつぶさに知られた。よって漢の史官はこれをくわしくここに載せることができた。

東夷の諸国は、魏の首都洛陽からは遠いので、天子はこれが統轄を遼東の公孫氏三代にまかせてきたが、公孫淵がこれを横どりしたので、魏は公孫淵を討ち、朝鮮の楽浪、帯方の二郡を接収した。

その後、高句麗がそむいたので、これを追撃した。魏の軍隊は烏丸・沃沮・粛慎の地（中国東北部から朝鮮の東にかけての地域）を通り、大海（日本海沿岸）までたっした。そのようなしだいで、魏の高句麗遠征軍によって東夷諸国のことがよほど詳しく中国に分った。

よってその国別と、その違いとを順にしたがって書く。これでもって前史の不備なところを補うことができる」（全集五五、一三〜二四頁）。

倭人伝の帯方郡から邪馬台国までの「万二千里」ついて再検討する。まず『三国志』鮮卑伝の記事に着目する。

鮮卑伝の注に『魏書』が引かれる。鮮卑は東胡の遺民で、鮮卑山一帯に住んだ。東は「遼水」、西は「西域」と接する。後漢の二世紀代、檀石槐が大人に推戴され、高柳の弾汙山、啜仇水にその本拠を置いた。南は漢の国境、北は丁令の地、東は夫余、西は烏孫と戦った。匈奴の旧土を獲得した。東西一万二千里、南北七千余里であった。

鮮卑の境域は帯方郡から邪馬台国の「万二千余里」、「帯方郡から狗邪韓国まで「七千余里」に対応するという。

さらに『漢書』西域伝を引く。

罽賓国は長安から万二千二百里、烏弋山離国は万二千二百里、安息国は万一千六百里、大月氏国は万一千六百里、康居国は万二千三百里、大宛国は万二千五百五十里。端数を四捨五入すると、ほぼ「万二千里」となる。漢の直属国になっていない西域諸国の首都は、長安からすべて「万二千里」となっている。卓見であった。

「万二千里」というのは中国の直接支配をうけていない国の王都がはるか絶遠のかなたにあることをあらわす観念的な里数なのである（全集五五、四三頁）。

帯方郡から不弥国まで万七百里で、のこり千三百里、水行二十日で投馬国、水行十日、陸行一月で邪馬台国に至る。「万二千里」を「遠隔地の意味をあらわす観念的な数字」とみる立場から「千三百里」の意味は不問にする。

里程の検討は倭人伝から東夷伝におよぶ。もともと東夷伝についての研究はすくない、俎上にのぼることはなかった。

夫余は玄菟郡から千里、方二千里。高句麗は遼東の東千里、方二千里。東沃沮は西南に長く千里。韓は方四千里。各国の彊域を千里単位で表現している。そうした記述にたいする、清張のとらえどころはちがう。戦争の問題である。魏の東方計略が東夷伝の本質だからだ。

「魏は、公孫氏の討伐で楽浪・帯方の二郡を接収し、ついで高句麗の討伐と二度も朝鮮に出兵しているから、朝鮮のことにはよほど詳しくなってきたはずである。その侵略軍の見聞と占領統治の原資料にしたがって魚豢は朝鮮全土の事情を『魏略』に書き、陳寿が『三国志』「東夷伝」にそれを踏襲した。ために、漢の張騫が中央アジアの大月氏国に使いし、西域の「河源を窮

め」たのにならって、魏軍の征戦が東夷の「河源を窮め」たように陳寿は序文に書いた。それなのに、各領土の長さや広さを形式的な里数で書いただけで、その領土内の各地間の距離を少しもあげていないのはふしぎである」（全集五五、四九頁）。

陳寿は地政的条件をふまえたうえで、「東夷伝」を記述したのだ。清張は疑問を呈しながら、「陳寿の創作」と結論づけてしまった。

陳寿は「倭人伝」の距離に三・五・七の奇数を配分した。

「天子の直領である王畿は「方千里」となっている。「五服」に王畿と外辺の夷服・鎮服・藩服を加えたのが「九服」である」。こうした「禹貢」五服、九服制についてふれながら、つぎのように結論づける。

「郡より女王国の「万二千余里」は『漢書』の「西域伝」の里数から、「倭人伝」の里数・日数は『漢書』の五服の記事から、陳寿がでっちあげた虚妄の数字だと考える」（全集五五、五三頁）。

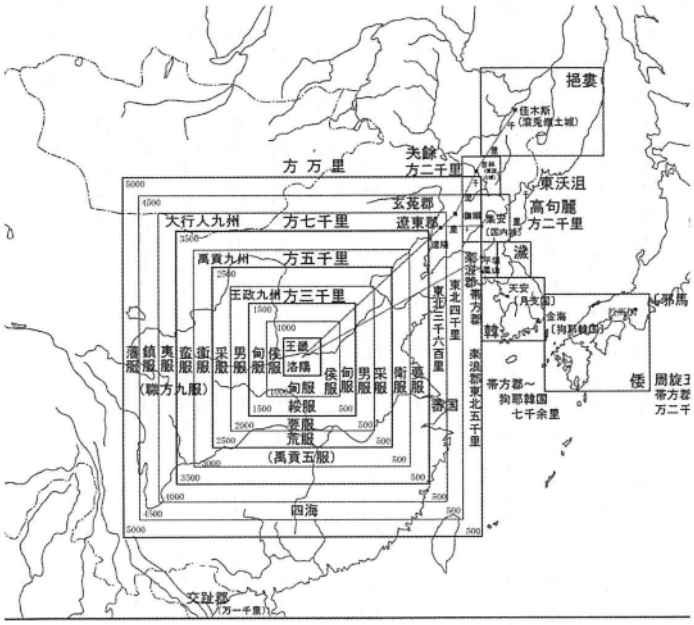
東夷伝の記述が九服制にもとづいた天下思想と言っていない。「虚妄の数字」として、夏華思想まで切り捨ててしまった。わたしは肯定したにすぎなかった。「王畿」は「畿内」と同義であり、天下思想を問題にすれば、「畿内」の用い方に敏感になる。

水行・陸行の「日数」表記について、清張は「「倭人伝」の行程の「里数」になっている部分は、帯方郡使が実際に通行したところ、「日数」になっている部分は、郡使がじっさいに行っていないところ」で、「陳寿（または魚豢）は、帯方郡からの報告書にもとづき「里」と「日」でその区別をあらわした」と考える。しかし帯方郡使はじっさいに邪馬台国まで行っている。

不弥国から投馬国までの水行二十日、投馬国から邪馬台国までの水行十日、陸行一月、あわせて水行三十日・陸行三十日は、邪馬台国をはるか遠い「南」の地とした。「千三百里」ははるかかなる距離だ。

二三八年、司馬宣王は遼東の公孫淵を攻撃した。明帝はいう「往復に何日かかるか」。司馬宣王は答える。「往きに百日、攻撃に百日、もどりに百日、六十日間を休息にあてます。このようにすれば、一年で充分です」と。洛陽から遼陽（遼東郡治）まで四千里である。その意味で、水行・陸行六十日の行程は遠い。狗邪韓国から邪馬台国まで「周旋五千里」、水行・陸行三千七百里と水行・陸行二月の千三百里だ。「周旋」も遠絶な邪馬台国への道のりをあらわしている。

陳寿は「『漢書』の「倭人」を修飾した儒教の東方神仙観をもうけつぎ、



「倭人伝」にはそれにそって長寿で礼節を知る国のように脚色をした」（全集五五、五五頁）。

東夷伝序には夷狄の国々を順々に記述し、それぞれの異なった点を列挙して、これまでの史書に欠けていたところを補おうとする。夫餘にはじまり、さいごに倭人の条がある。

東夷伝の序は、『尚書』禹貢篇の五服の制、『周礼』九服の制についてのべる。遼東の公孫氏を討伐、さらに高句麗を征伐した。夷狄の国々について記述する。

「漢委奴国王」金印を「委奴(いと)国」と解釈する。「一大率」を「一支率」と誤りと着想した。伊都国の王墓については、平原墓については未報告であったため、清張の邪馬台国論のなかで与しえなかった。井原鑓溝遺跡出土のガラス璧玉について、「今の前原町にいた族長は、後漢のころに洛陽政府から楽浪郡庁経由で服属地たる「国王」として玻璃璧を下賜されたのであろう（「吉野ヶ里と邪馬台国の影」『Ｑｕａｒｋ』一九八九年五月号、「『清張古代游記　吉野ヶ里と邪馬台国』一九九三）

「一大率」は「一大率」として解釈しておくが、近年前原市域で楽浪土器が出土するようになった。これまでの前漢鏡、後漢鏡とともに、人々の往来をしめす土器がみつかってきている。壱岐島の原ノ辻遺跡でも同様である。一大率（大率）は伊都国に治した。韓や帯方郡との対外交渉をつかさどっていた。

楽浪土器は楽浪郡域外では、北漢江流域の成川洞、勒島、対馬、壱岐などに分布する。楽浪郡との直接的な関係によるものだ。

平原墓の大型内行花文鏡の製作地が問題である。平原墓の時期は後漢鏡から一世紀後半から二世紀代だ。弥生後期の一世紀前後に小形仿製鏡が西日本の各地や韓国南部地域に分布する。基本的に前漢鏡を原型としている。平原墓に先行する時期である。大型内行花文鏡と小形仿製鏡は形態、鋳造技術に差異がある。前者の製作地は三世紀代のホケノ山古墳・下池山古墳などから奈良盆地である可能性がつよい。

「吉野ヶ里と邪馬台国の影」そして「逃げ水 邪馬台国」へ

松本清張は吉野ヶ里遺跡に立って考える（「吉野ヶ里と邪馬台国の影」）。

吉野ヶ里の墳丘墓は「径百余歩」にだいたい合致する。しかし紀元前一世紀と後二～三世紀という時間的ギャップを調節しなければならない。ここは邪馬台国でない。奴国から邪馬台国までの長大な距離の問題に一つの解決案がある。伊都国の郡使は、邪馬台国に行っていなかった。「郡使は伊都国の郡出張所にすっかり落ち着いてしまったのだ。そのため女王の都とする邪馬台国を遙か遠い所にあるように創作して郡庁に報告した。陳寿の筆がそれをさらに白髪三千丈式に誇張した。わたしはこれを「虚妄の数字」だと書いたことがある。陳寿の概念には帯方郡庁から魏都洛陽までの遠さが反映していたのかもしれない」。

倭人伝には帯方郡の遣いは邪馬台国まで行っている。正始元年（二四〇）、帯方太守の弓遵は建中校尉の梯儁らをおくり、詔書と印綬をたずさえ倭国に行き、倭王に位を仮授し、詔とともに銅鏡などを下賜している。正始八年（二四七）には塞曹掾史の張政らが遣わされ、詔書と黄幢が難升米に仮授されている。卑弥呼の死、冢の造営をまのあたりにして、張政らは帰還する。

清張がなぜ邪馬台国入境説を否定するのか、謎である。

吉野ヶ里に見切りをつける。「弥生時代の銅器製作の工場」とみた。「吉野

ヶ里遺跡もまだまだ動揺しているようである」。「吉野ヶ里はまだ発掘調査の途中にある。今後、どのような新発見があるのかわからない。書くほうも動揺を感じるのである」と。「動揺」という語をくりかえしている。清張の邪馬台国九州説への動揺、疑問であった。

「逃げ水 邪馬台国」（『文藝春秋』一九八九年七月号）では、王仲殊の三角縁神獣鏡、呉の工人、畿内邪馬台国内製作説を真摯にうけとめる。「呉の工人は邪馬台国へ行って三角縁神獣鏡を作ったという王仲殊氏の新意見に、列席のパネリストがだれも質問しない。あきらかに立場の違う講師がいるのに討論一つしない」。清張の落胆ぶりがにじみでているようにおもう。

難升米、黄幢、小林行雄の三角縁神獣鏡論の検討である。「小林氏の同笵鏡の分布研究は精緻極まるもので、揺ぎなき座を占めている。しかし、そこから先は氏の想像や推測で、問題になるところである」。そして椿井大塚山古墳の被葬者を「難升米の子孫」とみる。「舶載鏡説にもとづく想像である」とことわったうえでの論である。

「もし小林説式の推測や想像が許されるなら、わたしは椿井の首長は卑弥呼の使者としてしばしば帯方郡太守に陳情し、二度魏都に詣って倭(ママ)帝から率善中郎将に任じられた難升米の子孫であろうと思う」。「卑弥呼の死後、難升米はヤマトを離れて近畿の北部に拠点を移した。台与は泰始二年（二六六）に晋の武帝に使者を出し方物を献じたというが、その後の消息はわからない。卑弥呼系統は絶えたにちがいない。しかし、難升米の子孫は栄えた。それが山城国椿井に勢力を張っていた首長である。代々の首長は先祖難升米の大事な遺産、大量の三角縁神獣鏡をかたく継承した。ほんらいなら卑弥呼系統に渡すべき鏡だったのを。

このようにみれば、椿井の三角縁神獣鏡の多様な同笵鏡が五枚一組としてもらったものが、そのままここに貯蔵され、のちに全国各地の首長に分与されたという理由も、ヤマト盆地の古墳に、卑弥呼の冢はいまだ不明だが、大和盆地に三角縁神獣鏡の数が椿井大塚山古墳にくらべて少ないという謎も解けてくるのではなかろうか」。

小林行雄はかつて、難升米を一大率ではなかったかとのべた（『女王国の出現』（『国民の歴史』1、文英堂、一九七六）。それを発展させたようだ。

小林行雄は「難升米こそ、『魏志』倭人伝の中段の部分にいう、伊都国にいた一大率であったかもしれぬ。いずれにしても、邪馬台国の所在地の推定には、難升米の本体をあきらかにすることが、同時に必要になってくる」と考える（『女王国の出現』、三〇一頁）。

さらに小林はだいたんに推論する。考古資料に関して、絶対的・相対的にも「ない」と結論づけることはきわめてむずかしい。

大和自身には、また同笵鏡の分布が意外と少ないことが問題になる。大和には未調査の古墳が多いから、将来、その数がふえる可能性もないではない。しかし、現状から判断すると、多数の同笵鏡を出土した古墳が大和にはなく、大和に隣接する京都府南部の椿井大塚山古墳であるという事実が、その背後に秘められた重要な意味を、雄弁に物語っているといえよう。

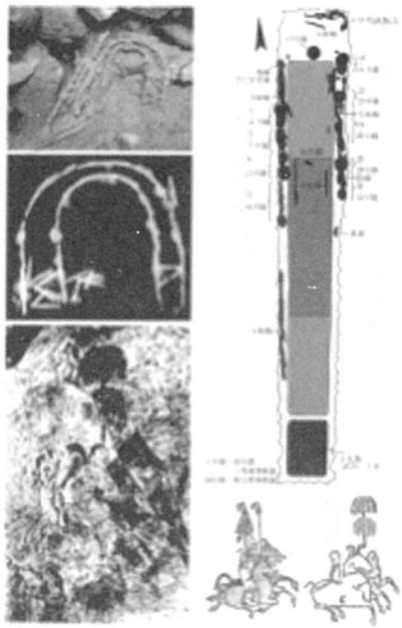
すなわち、京都府椿井大塚山古墳の被葬者が大量の同笵鏡を入手した段階においては、大和王権は地方の首長を政治的に服属させる目的をもって、これらの鏡を利用しようとしたので、大和の内部には、それほど多くの鏡を保有する必要がなかったと考えることができる（『女王国の出現』、三二六頁）。

椿井大塚山古墳の地理的位置を解釈する。「交通の要衝を支配下にもっていた京都府椿井の首長が、とくに選ばれて大和王権の依託をうけ、同笵鏡の分配によって象徴される使命のために、まず西日本の各地に派遣された」と

推論する。

今日、奈良県天理市黒塚古墳で三三面の三角縁神獣鏡が発掘されたことと、発生期・前期古墳の年代、箸墓古墳の年代、三角縁神獣鏡の段階的、時期的「配布」論、三角縁神獣鏡の編年が論議されている。皮肉なことに、「巨匠」亡きあとだ。椿井大塚山古墳の鏡の報告書もさる場所から日の目をみた。報告書も刊行販売された。銅鏡図録も刊行された。箸墓古墳や椿井大塚山古墳の年代論もかわってきている。初期の前方後円墳は四世紀代にくだることはないのだ。

邪馬台国の境域は奈良盆地、大阪平野、山城盆地をふくむ。山城の椿井大塚山古墳も邪馬台国内だ。特殊器台形埴輪の分布状況からも推定しえる。

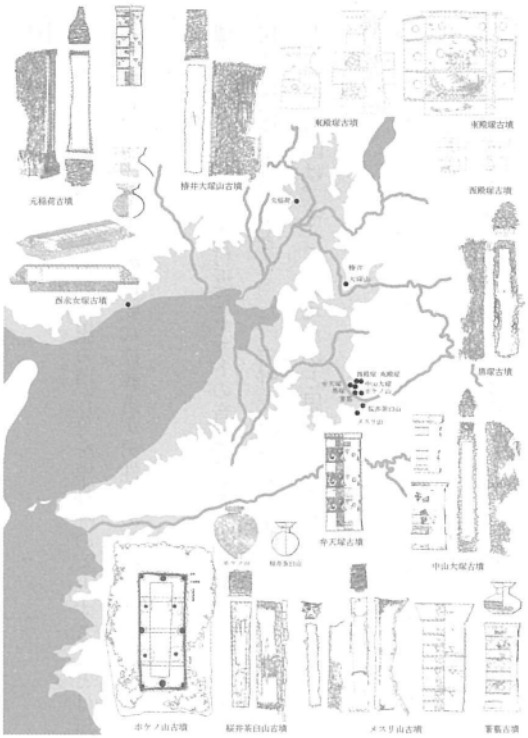


難升米が授与された「黄幢」は軍旗で、黒塚古墳のU字形鉄製品がその実物資料と考えている。発掘現場を見学し、U字形の鉄器をみたとき、黄幢と直観し、即座に発掘調査者に話したのであった。その後精査され、鉄製品に布類が付着して、鉄管はひもでとじられていたことがわかった。銀印は確認されなかった。その「黄幢」を根拠に、黒塚古墳の被葬者を難升米に想定している。賛同する人は皆無であるが、その蓋然性はきわめて高いのだ（東潮二〇〇一「倭と栄山江流域」『朝鮮学報』一七九）。

小林行雄の一大率＝難升米説、松本清張の椿井大塚山古墳の難升米子孫説、そしてわたしの黒塚古墳、難升米墓説だ。

小林行雄・松本清張の論もつきつめ、考えぬかれた論であった。現在の新資料によって検証されねばならない。

難升米に授与された黄幢を、小林は「黄幢(きいろのはた)」、松本は「黄幢



（魏軍の旗）」とした。黄幢は軍旗である。軍旗であるか、黄色の旗とみるかで意味がちがってくる。

三世紀前半、後漢、公孫氏、魏、高句麗、韓辰王、倭卑弥呼の国際関係が展開する。

二〇四　公孫氏帯方郡を設置
　公孫氏・韓辰王・倭卑弥呼馬形帯鉤
　「取（市）」（弁辰条）と「南北市糴」（倭人条）鉄板
二三五　青龍三年鏡（方格規矩鳥紋鏡）
二三八　魏の公孫氏討伐
二三九　景初三年鏡（三角縁神獣鏡）
二四四・二四五　魏の高句麗戦争　毋丘倹碑
二四五　難升米に黄幢を仮授　魏倭軍事同盟
二四七　魏の塞曹掾史張政　難升米に詔書と黄幢を下賜
　黄幢（軍旗）・U字形鉄製品（黒塚古墳）と難升米
　黒塚古墳と難升米　〈銀印青授と黄幢〉
二四七　韓王辰王没
二四七　倭王卑弥呼没　箸墓古墳

一九八九年『Ｑｕａｒｋ』五月号の「吉野ヶ里と邪馬台国の影」から同年の『文藝春秋』七月号の「逃げ水　邪馬台国　吉野ヶ里に見えた邪馬台国は陽炎にすぎない」と、清張の邪馬台国論は終焉する。八〇歳をむかえようとしていた。その三年後の一九九二年八月四日に旅立った。

清張の吉野ヶ里遺跡への思いはただごとではなかった。吉野ヶ里と邪馬台国の関係についてつきつめる。

「弥生中期後半で廃れた吉野ヶ里の墳丘墓を卑弥呼の冢とすることは無理である。まして墳丘上中央の枢要な被葬者が男性とあれば、さらに悲観的に傾く」。

「難点の二は、吉野ヶ里付近にヤマトの音を写した地名がないことである」。

「榎氏は筑後平野の中といった。吉野ヶ里はまだ平野の北の入口である」。

「九州邪馬台国は、そこに見えたかと思ったらまたむこうに陽炎のように逃げた」。

「わたしは九州説だが、これだから邪馬台がどこにあるとは一度もいったことも書いたこともない」。

「吉野ヶ里遺跡とは、いったいなんだろう。「使訳を通ずる三十国」の一つにしてはあまりにも巨大すぎる。他の二十九国も存在すまい。正体は時が経たないとわからぬ」（『文藝春秋』八九・七、全集六五、四六八頁）。

「陽炎のように逃げた」邪馬台国。「逃げ水」に清張のおもい、もの悲しさを感じざるをえない。吉野ヶ里遺跡と邪馬台国を牽強付会に結びつける安易な風潮は歴史ねつ造にほかならない。

清張をいったんは惑わせた吉野ヶ里遺跡は、いまだ史実と虚実がうずまいている。

吉野ヶ里は陽炎であった。邪馬台国九州説への決別であったかもしれない。

一九九〇年三月から一九九二年五月に連載された「神々の乱心」には卑弥呼の鬼道、北方シャーマニズム、卑弥呼と「男弟（実弟ではなく政治的な参与者）」の関係を「夫婦」と示唆する。「逃げ水　邪馬台国」から、卑弥呼像を追い求める。

「例の邪馬台国の卑弥呼は鬼道に事えたと魏志倭人伝にありますね。この鬼道がシャーマニズムだといわれています」（『神々の乱心』上、文春文庫、一三六頁）。

「萩園泰之は、その半分に欠けた鏡の背面に「く」の字形の模様があったということから、それを雷光形文様多鈕鏡と推定している。多鈕鏡は朝鮮に多く出土し、満洲にも分布している。こうした鏡を懸けているのは、そこで一種の祭儀を行なっているにちがいない。とすれば、その祭儀は朝鮮から満洲にかけての北方大陸シャーマン系であろう。ここでだれもが思い出すのは、「魏志倭人伝」に邪馬台国の女王卑弥呼が「鬼道に事え、能く衆を惑わす」とあることである。この鬼道は北方シャーマニズムで、卑弥呼は巫女だろうというのが一般の解釈で、どの関係書にもそう出ている。卑弥呼も魏の天子から「汝の好きな鏡」として銅鏡百枚をもらっている。シャーマン系の祭儀と鏡とは切りはなせないようである」（『神々の乱心』上、文春文庫、三四五頁）。

「その話を聞いて泰之は「魏志倭人伝」の卑弥呼を連想した。倭人伝には、卑弥呼のことをこう書いてある。《鬼道に事え、能く衆を惑わす。年已に長大なるも、夫壻無く、男弟有り、佐けて国を治む。王となりしより以来、見る有る者少く、婢千人を以て自ら侍せしむ。唯男子一人有り、飲食を給し、辞を伝え、居処に出入す》。一人の男だけが卑弥呼の居処に出入りして、その託宣を皆に伝えるというのである。これは「お取次ぎ」の役である。彼だけが夫のない卑弥呼の居室に自由に出入りして飲食を給するのは、事実上の夫婦であることを暗示している。

なんとこの関係は、斎王台と平田会長によく似ているではないか。国を治める「男弟」（実弟ではなく政治的な参与者）は、月辰会を統べる平田会長である。会長は、斎王台の静子の託宣の取次ぎ者であり、月辰会の主宰者である。おそらくは静子と事実上の夫婦と想像される」（『神々の乱心』下、文春文庫、三三七～三三八頁）。

『神々の乱心』の舞台は魏志東夷伝の世界である。松花江流域の吉林市域に夫餘の王都・東団山城があり、夫餘を攻略した高句麗の、龍潭山城がある。さらにその東北の東京城（黒龍江省）に渤海の都、上京龍泉府が位置する。渤海は高句麗の領域と粛慎の地を支配した。遣渤海使、渤海使の交流が環日本海で展開する。

「横倉健児はシナ語がかなりできる。だが、満洲語はまったくわからない。無理もないことで、シナ語と満洲語とは系統がまったく違うのである。満洲語はこの東アジアの東北辺で固有に発生したもので、ツングース語に属する。この森林と草原地帯にいる原住民族は、漢のころに史書に現れ、森林地帯には粛慎・貊・夫余・高句麗などの諸族が棲み、草原地帯には東胡・烏丸・鮮卑など諸族がいて、原始的な狩猟生活をしながら互いに抗争していた。こうした勇猛な部族のために妨げられて漢の武帝はこの地を征することができず、後漢の光武帝も一部の軍隊を日本海沿岸まで通過させただけだった。その鮮卑族の子孫が満洲人である。漢人にとっては満洲語はさながら外国語と同じである」（『神々の乱心』下、文春文庫、七四頁）

「彼は翌日午前十時ごろ長春から吉林府に向かった。満洲は北に向かうと高地になる。吉林は長春と同緯度だが山に近いだけに寒い。山は朝鮮と国境を区切る長白山脈である。この吉長線の乗車時間は約三時間だが、車窓に眺める風景は荒涼としていて、いまも粛慎、貊、夫余などの鮮卑族（東胡）が騎馬で疾駆しているように見える」（『神々の乱心』下、文春文庫、七五頁）。

「渤海国の船が九世紀から十世紀ごろに能登半島の福浦港に入って日本と

交易していたのはご承知のとおりです。その東京城の町にも馬賊がたびたび襲撃してきます。日本からの考古学者や歴史家の調査団が東京城に滞在しますが、馬賊が襲ってくるたびに命からがら逃げ出さねばなりません。そのうちに東京城の遺構も馬賊の手で焼き払われてしまうのじゃないかと心配です」。「間島の朝鮮人は昔の渤海人の末裔らしいという話でした。渤海人は高句麗系で、高句麗種族は勇猛です」(『神々の乱心』下、文春文庫、一〇七～一〇八頁)。

一九五四「風雪断碑」(「断碑」)**森本六爾・鳥居龍蔵他**
一九六三「陸行水行」**倭人伝**
一九六六～一九六七「古代史疑」
一九六八「霧笛の町」(一九六八「内海の輪」)**高地性集落**
一九七一～一九七二「古代への探求」(一九七四「古代探求」)**日本書紀・東夷伝**
一九七一「遊史疑考」(一九七一「遊古疑考」)
一九七二「北ベトナム古代文化の旅」(朝日新聞一九七二・一二)**銅鼓・銅鐸・交趾郡**
一九七二「邪馬台国を語る」(対談・江上波夫)
一九七六『清張通史1　邪馬台国』
一九八九「吉野ヶ里と邪馬台国の影」『Quark』一九八九年五月号、「『清張古代游記　吉野ヶ里と邪馬台国』一九九三)**吉野ヶ里遺跡**
一九八九「逃げ水　邪馬台国」(『文藝春秋』一九八九・七、「『清張古代游記吉野ヶ里と邪馬台国』一九九三)**三角縁神獣鏡・椿井大塚山古墳**
一九九〇～一九九二「神々の乱心」(『週刊文春』一九九〇・三・二九～一九九二・五・二一)**卑弥呼・多鈕細文鏡・内行花文鏡・東夷伝**

(佐藤芳子・中川里志二〇〇六『松本清張研究』参照)

松本清張と朝鮮・ベトナム

松本清張と軍隊

二〇一〇年一〇月、松本清張の軍隊時代の足跡をたどるため、ソウル龍山と全羅北道井邑(郷校、忠武公園、井邑第一高等学校)を訪ねた。

松本清張は一九四二(昭和一七)年から一九四五年八月まで軍隊にいた。十七年の十二月に私に召集がきた。赤紙には「教育召集」と書いてあるが、当時は、その名目で戦場に持って行かれる場合が多かったので私も覚悟した(「半生の記」『全集』三四、四五頁)。

福岡の兵舎に五日間いた。雨の降る未明、兵舎から博多港の埠頭まで電車通りを歩いた。そして釜山行きの連絡船に乗せられた。ニューギニヤ戦場には、京城(ソウル)に行き、東京・大阪から来る召集兵を落ち合って兵団を編成したという。

釜山で初めて朝鮮の景色を見た。汽車で「京城の一つ手前の駅の龍山」駅で降りた。練兵場に着いた。龍山の二二部隊であった。

われわれがこの兵舎に到着したとき、先に出発する予定のニューギニアの要員がすでに毎日訓練されていた。訓練は輸送船が撃沈されたときに海にとび込む練習ばかりだった。滑り台のような高いところに上って砂地にとび下りるのである。泳ぎに自信のない私は、それを見ただけでも死を観念した(「半生の記」『全集』三四、四七頁)。

脱走を「断念させたのは、朝鮮海峡の存在と、残した家族の生活保障であった」。

丸二年の軍隊生活。衛生兵（中隊付）であった関係で公用証をもらい、単独外出ができたという。薬を買いに行く名目だ。薬を買いにいく途中で古本屋をよくのぞいた。仁寺洞(インサドン)の一画であろうか。

「総督府横の付属病院」にでかけている。

薬専の付属病院行くには総督府の博物館の脇を通る。公用証は持っているが、さすがに博物館まで入って行く勇気はなかった。入り口は壮麗な朝鮮宮殿の楼門となっている。私は、その朱い門を見上げながらむなしく前を往復した（「半生の記」『全集』三四、五〇頁）。

一年後に、京城の兵舎から、「全羅北道井邑」に編成された「朝鮮の西海岸の防衛に当る新兵団」に移る。

兵舎は土地の農学校を接収して置かれた。屋外居住は大尉以上で、中尉以下は生徒の寄宿舎に分宿していた。この寄宿舎は細長い棟になっていて、床は温突のために油紙が貼ってある。だが、せっかくの温突も燃料が無いため寒い冬に一向に役立たなかった（「半生の記」『全集』三四、五一頁）。

おどろいたことに、それまで防空演習をやっていた朝鮮人の町が翌朝から一変して、日の丸の旗を改造した太極旗が一斉に掲げられたのである（「半生の記」『全集』三四、五四頁）。

井邑から秋風嶺、大邱をへて釜山に着く。夜の海峡をわたり、山口県の仙崎の港に至る。松本は運よく戦死をまぬがれた。

京城龍山と井邑

松本清張は一九四二年召集をうけ、朝鮮の部隊（龍山）に配属された。

井邑の部隊が駐屯した農学校は現在、高等学校にかわっている。兵舎に使われた建物は現在の正面の校舎の前庭になっている。校長に案内してもらった。校舎内に郷土室があり、学校の創立以来の校史が展示されている。そのなかに部隊の写真があった。清張が所属した一年まえの写真だ。「半生の記」に敗戦まぎわの軍隊生活が描かれている。軍事教練は撃沈された輸送船からの脱出訓練ばかりであった。清張は前線への輸送船がなく、戦死をまぬがれたのだった。

幸いなことに、ニューギニア行は中止になった。すでに輸送する船が無くなっていたのだった（「半生の記」『全集』三四、四八頁）。

たんたんとのべる、このひとことは戦争の悲惨さ、二〇〇万の餓死者をうみだした戦争の悲惨さを伝えている。学徒動員の二年後である。学徒動員は「死への道」であった。清張は紙一重で命びろいした。

「京城」（今のソウル）の朝鮮総督府の博物館のことにふれる。動員の以前に九州各地の古墳などをまわっていた清張は兵役のさなか、近くをなんども通りながら、立ち寄っていない。博物館は徳寿宮にあった。清張の知るところではないが、一九四一年から総督府博物館は閉館していた。一万余の遺物をえらんで、総督府博物館慶州分館に疎開していた（有光教一『朝鮮考古学七十五年』六興出版）。南富鎮二〇〇四「松本衛生兵の朝鮮体験」（『松本清張研究』五）。

衛生兵として、名乗って博物館をたずねていたら、博物館主任であった有光教一先生に出会っていたかもしれない。

一年後、龍山から井邑（全羅北道）の新兵団に移動した。

兵舎は土地の農学校を接収して置かれた。屋外居住は大尉以上で、中尉以下は生徒の寄宿者に分宿していた。

一九一〇年五月に井邑農林高等学校として創立、一九八九年九月に井邑農工高等学校、二〇〇三年九月に井邑第一高等学校に校名がかわった。旧校舎（兵舎）の地に、創立百周年碑がたてられている。記念して「歴史館」がつくられていた。

当時の校舎（兵舎）は現在の校舎の前方にあったという。

校史資料室があり、校長の許可をうけて見学した。「一九四二年四月一八日海北教場転出記念」の説明書きのある写真があった。

最前列の椅子に腰掛けた二人、師団長と参謀長であろうか。軍医部に、少佐（部長）、大尉一人、中尉一人、准尉一人、軍曹一人（歯科医）、伍長二人、上等兵（松本）、一等兵一人で構成されていた。五四名が並列する。

そんな暑い八月のある朝、今日は陛下の録音放送があるから、全員司令部の庭に集るようにとの達しがあった。……

ようやくラジオが終った。結局、何が何だか分らなかった。……

それまで防空演習をやっていた朝鮮人の町が翌朝から一変して、日の丸の旗を改造した大極旗が一斉に掲げられたのである（「半生の記」『全集』三四、五四頁）。

やがて送還列車に乗り、秋風嶺を越え、大邱を通過、釜山から連絡船で仙崎（山口県）に着いたという。清張の戦争は終った。

松本清張とベトナム

二月一七日、大阪関空を一〇時三〇分にたって、一四時二〇分ホーチミン空港に降り立った。サイゴン駅で列車のチケットを購入。ホーチミン市内に。ベトナムは二度目だが、ホーチミン（旧サイゴン）ははじめてだ。サイゴンは駅名としてのこっている。

二月一八日、歴史博物館・動物園・植物園・美術博物館・ベンタイン市場を歩き、サイゴン駅から一八時三〇分のハノイ行き列車に乗る。翌一九日の早朝五時ごろフェを通過する。二〇日コーロア土城をめぐる。二一日ハノイ駅からラオカイに向かう。バスでバックハに。ラオカイにもどり、ベトナム・中国の国境に。雲南省からの観光客、おなじ民族。

二二日、ラオカイからハノイ。二三日に歴史博物館・民族学博物館をみて、ホーチミン廟、タンロン安南都護府を見学する。ハノイ空港〇時三〇分の飛行機で六時四〇分大阪関空に着く。

今回の旅行の目的はホーチミン（サイゴン）からハノイの南北縦断、中越国境と村を訪ねることにあった。

紀元前一一一年、漢の武帝はベトナムの北部に交趾郡・九真郡・日南郡を設置した。南越国の地。

後二年、交趾郡の人口は七四万六二三七人で、楽浪郡の四〇万六七四八人にくらべ多い。三年、林邑王国が成立し、七～九世紀に唐の安南都護府が置かれた。

松本清張記念館の研究助成をうけて、韓国とベトナムを調査した。

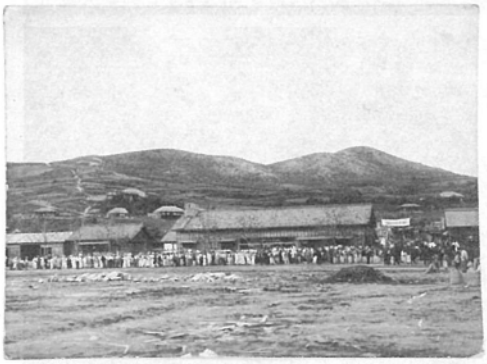


図1－2　井邑

図1－1　龍山

日帝時代の校門

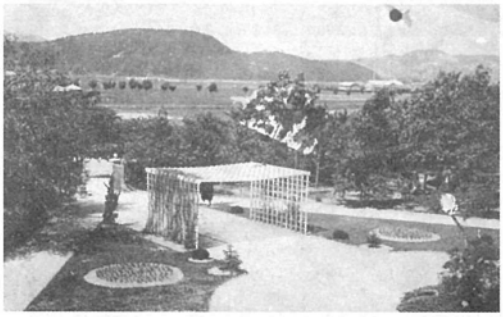


図3　井邑

図2　井邑　解放後の高等学校

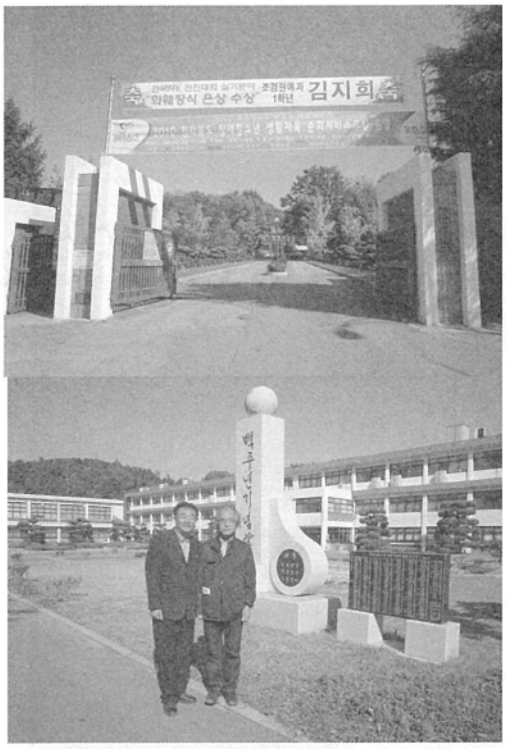


図5　井邑　キム クヒョン校長とともに　創立百周年碑　　旧校舎附近

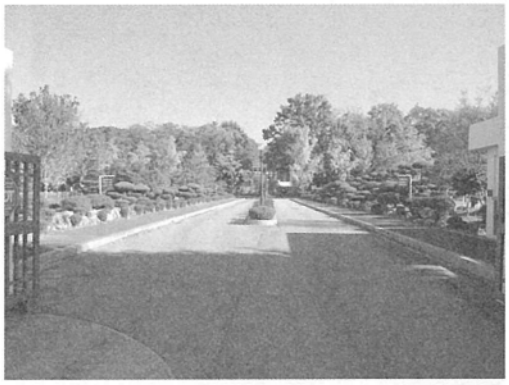


図4　井邑

北ベトナム古代文化の旅

〈第3部 ⑩〉　松本清張

文様などに類似の点

葬儀や祭祀の祭器に使う

図7　松本清張の「北ベトナム古代文化の旅―銅鼓と銅鐸」

校舎　日本軍に接収されたときがあった　旧校舎は庭のところ

図6　井邑　高校の歴史館

図9　交趾郡の塼室墓

北ベトナム古代文化の旅

〈第3部⑨〉　松本清張

漢墓とかめ棺

行政官渡来の跡示す

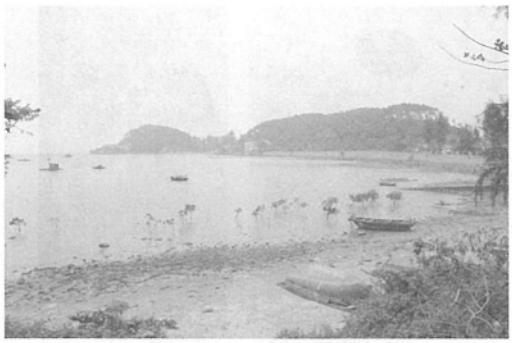
北部九州との興味深い関連

朝鮮から日本に？

推定される分布

図8　松本清張「北ベトナム古代文化の旅―漢墓とかめ棺」

図11



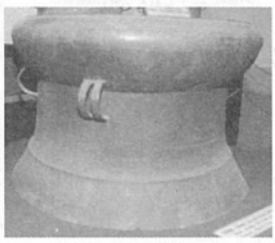
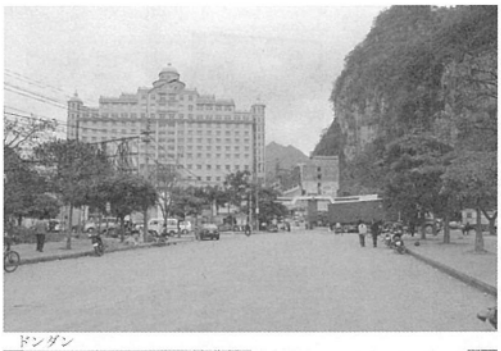


図10　銅鼓

図13　コーロア土城



ドンダン

ドンダン

ラオカイ

ラオカイ

図 12 越中国境

図 15　ベトナム諸民族の服飾

図 14　安南都護府

平成二十四年三月三十日発行

第十二回松本清張研究奨励事業研究報告書

編集・発行　北九州市立松本清張記念館
北九州市小倉北区城内二番三号
電話　〇九三―五八二―二七六一

印刷・製本　㈲プラネット印刷

松本清張研究奨励事業

第15回

募　集　要　項

一、趣　旨　時代を見つめ続けた松本清張の文学を研究することは、今後の時代の進むべき方向性と私たちの生きていく指針を見出すことにもつながります。このような視点から、清張の作品や人物像についての研究活動を推進し、歴史や社会の事象の深層を追求する精神を継承していくため、松本清張夫人ナヲ様のご厚意により創設しました。

二、対　象　ジャンルを問わず、松本清張の作品や人物像を研究する活動や、松本清張の精神を継承する創造的かつ斬新な活動（調査、研究等）で、これから行おうとするもの。年齢、性別、国籍は問いません。ただし、未発表に限ります。個人または団体も可。

三、内　容　入選者（団体）に二〇〇万円を上限とする研究奨励金を支給します。金額は企画内容を検討して決定します。

四、応募規定　今後取り組みたい調査・研究テーマ等の内容が具体的にわかる企画書、予算書、参考資料など（様式は自由、ただし日本語）を、平成二十五年三月三十一日までに応募してください。

五、選　考　松本清張記念館内の選考委員会により選考します。

六、発　表　審査終了後、審査結果を直接通知します（六月末頃）。なお、入選者には開館記念日（八月四日）に、北九州市で贈呈式を行います。

七、その他　採用された企画は翌年の六月末日までに実施成果を報告していただきます。また、成果品である研究論文、報告書等は記念館が刊行予定の研究誌に掲載することがあります。成果品にかかる著作権等諸権利は、北九州市に帰属します。

八、応募先　〒八〇三―〇八一三　北九州市小倉北区城内二番三号
ＴＥＬ〇九三（五八二）二七六一　ＦＡＸ〇九三（五六二）二三〇三

北九州市立　松本清張記念館